

よろずは

平成二十六年
十一月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

言問はぬ 樹にはありとも
うるはしき 君が手馴れの
琴にしあるべし

万葉集 卷五―八二一 おおとものたびと 大伴旅人

【意訳】

ことばを言わない木ではあつても、あなたは、
りつばな方が愛用する琴のほずです。

この歌は、大伴旅人が藤原房前へ宛てた手紙の一部として『万葉集』に載せられています。旅人は、アオギリ製の日本式の琴を贈る際に「夢の中でこの琴の化身である少女に会いました」という創作を添えたようです。

琴の精は、大自然の中で根を張り幹をのばして太陽をいっばいに受けながら穏やかに過ぎた木としての生涯を語り、その後たまたま細工師に会うことができささやかな琴になったこと、りつばな方の愛用品になりたいと願っていること、など身の上を語ります。いつの日か私の音色を理解してくれる方のもとへ行けるでしょうか、という彼女の歌に返したのがこの歌だということです。「りつばな方」とは房前を指し、ごく自然にほめたたえています。優雅で心憎い演出です。

言葉が発しない木が、美しい音色を奏でる琴となり、さらに夢では言葉をも話す、という古代の人々の想像力には、現代のファンタジーにもひけを取らない自由さを感じます。

【万葉古代学係】